

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚科の臨床 (2008.02) 50巻2号:228～229.

帝王切開術瘢痕部に生じた皮下子宮内膜症の1例

金田和宏, 野村和加奈, 本間 大, 山本明美, 飯塚 一

MINI REPORT

帝王切開術瘢痕部に生じた皮下子宮内膜症の1例

金田 和宏* 野村和加奈* 本間 大*
山本 明美* 飯塚 一*

症例 29歳，女性

初診 2006年6月26日

主訴 下腹部の疼痛を伴う皮下結節

家族歴 特記事項なし。

既往歴 2000年12月5日帝王切開術にて出産，それ以降，妊娠歴はない。

現病歴 初診の約2，3年前から，帝王切開術瘢痕部皮下に月経時に疼痛を伴う結節を自覚していた。その後，徐々に疼痛の出現頻度が増えてきたため，近医産婦人科を受診した。消炎鎮痛剤・

抗生剤を処方されるも改善せず，当科に紹介された。

現症 下腹部に帝王切開術瘢痕を認め，そのやや左側に径15mm大の表面正常皮膚色，弾性硬の皮下結節を触知した(図1)。下床との可動性は不良であった。

臨床検査所見 血算，生化学検査に異常なし。CA125は正常値であった。腹部CT検査では，瘢痕部皮下に10mm大の結節があり，一部索状物を介して腹直筋と連続していた(図2)。

治療 既往歴，現症およびCT検査より，外性子宮内膜症，縫合糸による異物肉芽腫などを疑い，局所麻酔下に腹直筋鞘直上で，周囲の組織を含めて全摘出した。

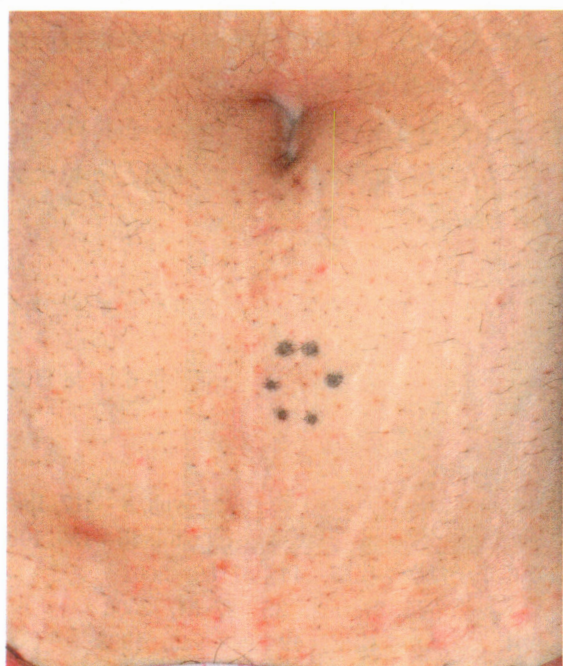


図1 臨床像：下腹部に皮下結節(点線部)

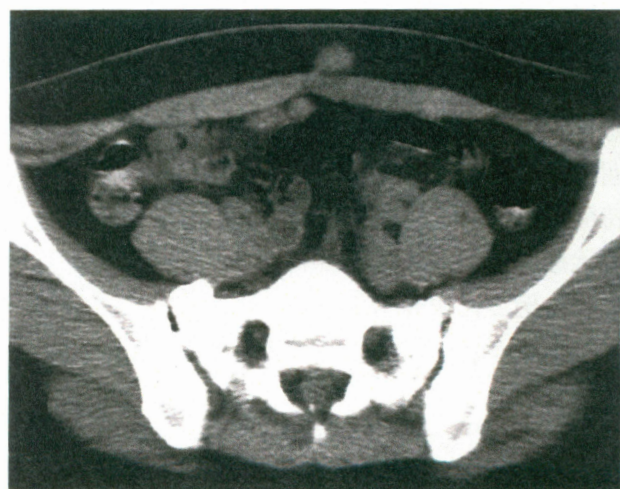


図2 腹部CT画像：腹直筋と接する皮下結節

* Kazuhiro KANETA, Wakana NOMURA, Masaru HONMA, Akemi ISHIDA-YAMAMOTO & Hajime IIZUKA, 旭川医科大学，皮膚科学教室(主任：飯塚 一教授)

別刷請求先 金田和宏：旭川医科大学皮膚科(〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1-1-1)

キーワード 帝王切開，子宮内膜症

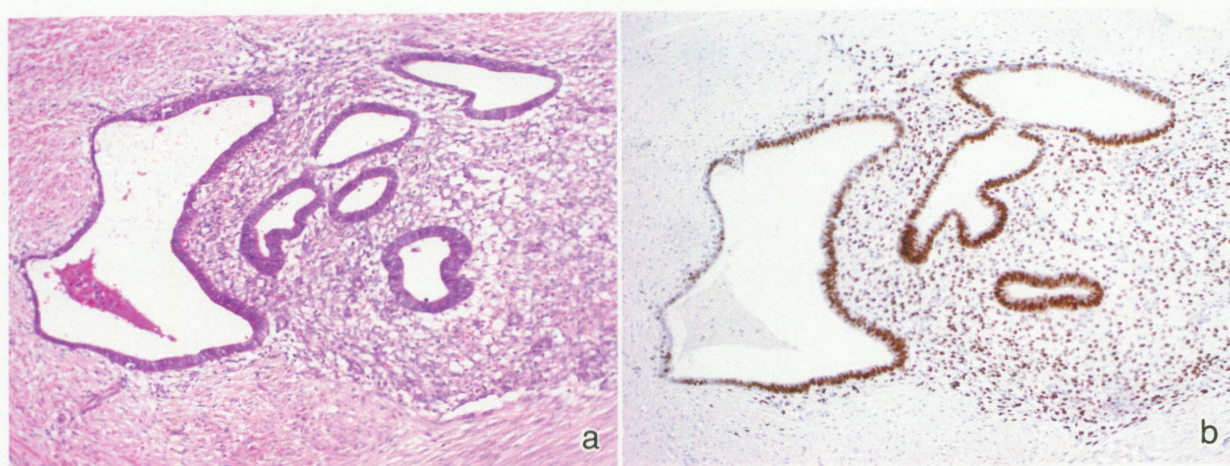


図3 病理組織像

a : HE 染色

b : プロゲステロン受容体染色

病理組織学的所見 皮下脂肪織内に、比較的境界明瞭な結節を認める。結節は子宮内膜類似の腺上皮で形成される大小さまざまな腺腔構造からなり、その周囲は内膜間質類似の紡錘形の細胞で取り囲まれている。強拡大像では、腺腔は1~数層の円柱上皮で構成されており、内部に赤血球を含んでいた(図3-a)。エストロゲンおよびプロゲステロン受容体の免疫染色では円柱上皮細胞および周囲の間質細胞の核に一致して陽性であった(図3-b)。

診断および経過 以上の所見より、帝王切開術癒痕部に生じた皮下子宮内膜症と診断した。術後、再発はない。

§ 考 察

子宮内膜症は子宮内膜組織が他の臓器や組織に異所性に増殖する疾患で、そのうち皮膚子宮内膜症は全体の約2%を占める¹⁾。部位は、臍・下腹部が多く、手術後の癒痕部に生じたものが約6割である。婦人科骨盤内手術後に多く、帝王切開、腹式子宮全摘術、腹腔鏡下手術などが挙げられる。なかでも帝王切開は、術後0.03~0.4%の頻度で発症するとされている²⁾³⁾。症状発現までの期間は、術後3カ月~20年と幅広いが、最も報告が多いのは2~3年で、自験例もそれに合致していた。骨盤内子宮内膜症との合併頻度は約20~40%である。

皮膚子宮内膜症の原因としては諸説あるが、術後癒痕部に生じる場合は、手術操作時に子宮内膜組織が直接散布され生着・増殖する機械的移植説が支持されている。鑑別診断としては、腹壁癒痕ヘルニアや異物肉芽腫、軟部組織腫瘍などが挙げられる。超音波やCT、MRIなどの画像検査も施行されるが、診断確定には、生検や治療を兼ねた全切除が必要である。保存的治療では再発例が多く、十分な範囲での切除が一般的であり、骨盤内子宮内膜症合併例では、術後のホルモン療法の追加も推奨される。近年、子宮内膜症の発症に、肥満細胞が関与し、ロイコトリエン拮抗薬により症状が軽快したとの報告もある⁴⁾。皮膚子宮内膜症に対する効果については明らかではないが、新しい内服治療として注目される。

子宮内膜症は、皮膚科領域においては必ずしも報告は多くないが、女性の腹部の手術癒痕部に生じた結節をみたときには、自覚症状の有無にかかわらず、本症を念頭に置く必要があると思われる。

(2007年4月2日受理)

文 献

- 1) Masson JC : Trans West Surg Assoc, 53 : 35-50, 1945
- 2) 本橋尚子ほか : 皮膚臨床, 43 : 1593-1595, 2001
- 3) 森岡信之, 深谷孝夫 : 子宮内膜症一病態とその治療一, 診断と治療社, 2000, 168-169頁
- 4) Sugamata M et al : AJRI, 53 : 120-125, 2005